

高山英華編

高蔵寺ニュータウン計画

書評者

毛利正光*

これは誠に忠実な新住宅都市建設計画の記録である。高蔵寺ニュータウンは、名古屋市の東北 20 km 国鉄中央線の沿線濃尾平野のまん中に面積 850 ha、計画人口 85 000 人として目下建設が進められつつある新都市で、わが国では大阪の千里ニュータウンにつぐ第二の住宅団地でもある。最近一般の都市・地域地区計画への関心がきわめて高くなり、これらに関する書物も数多く出版されるようになってきた。学校においても計画に関する学問に興味をもつ学生が最近とみに増加し、われわれの大学においても毎年行なわれる文化祭に取り上げられるテーマが都市計画であり、教室内で学生の主催する雑誌の主要な投稿記事は都市計画に関する問題であったりする。このようなことはかつては想像もつかなかったことで、20 世紀の後半における人類の直面する最大の問題は、宇宙開発と自動車に対する対策であるといわれる。このモーターレポリューションの時代に突入するに際して、自動車に対する都市のあり方、都市対策をいかにするかは、われわれの関心の深い重大なテーマでもある。

このようなとき本書の編者は、これまで数多くの地域計画を手掛けてきたわが国の第一人者であり、各種の地域開発の実際的な仕事を指導してきたエキスパートでもあり、その多くの仕事の一つが高蔵寺のマスタープランづくりで、これに約 5 年間の歳月を費している。編者も述べているごとく、本書はマスタープラン作成に至る正確な記録を目的としたもので、通常このような記録、報告書は単なるプランの説明、ぼろ大な資料の羅列、独善的な設計論の講釈におちいりがちであるが、読んでいて、論理の展開、プラン作成の作業をおおして積み重ねられた未知の問題とその解決のための会議、設計の方法論を展開しようとする試みなど、この作業に参加した多くの執筆者らの未来の都市像を建立しようとする意欲抱負が感ぜられ、あくことを知らせないものがある。これはこの作業に参加した人々のなみなみならぬ都市の未来像実現への情勢の結晶とも思われるものがあり、単なる報告書とは考えられない。

本書の全体は、第 1 部・I 明日の高蔵寺、II 計画のプロセスを追って、III 残された問題、第 2 部<各論>・I

都市設計の方法論、II 人口計画、III 中心地区施設計画、IV 住宅施設計画、V 交通輸送計画、VI 開発プログラムと総投資計画、VII 都市財政収支予測、VIII 住宅地開発と地方自治体、IX 開発水準と都市経営、X 高蔵寺における区画整理方式という構成からなり、都市を設計するという困難な問題の手建てを詳細にわたって説明している。

特に B5 版 254 ページにおよぶ大部の書物でありながら、ほとんど全ページにわたって図表または絵か写真が挿入されていることは読者の理解を深め、図表を豊富に使っていることが、それらに一連のおし番号をつけることを無用にしている。丁度外国の図書によく見られるような体裁をとっており、番号を逐一照合しながら読むわずらわしさをなくし、あたかも文学書を読むような親しみをもってこの書に接することを可能ならしめていることは、書物の構成としても新鮮さが感じられる。第 1 部は都市問題に興味をもつ一般の読書家が高蔵寺ニュータウンの計画の内容を知り、計画完成への思考過程を理解し、新都市建設に関連する種々の問題を知る上にも好個の読物であろう。また第 2 部の詳細に渡る施設計画から都市経営に至る問題の発端から最終決定までの方法論、資料、考え方の変遷、問題点の指摘等は専門の学徒にとって貴重なものとなる。申すまでもなく高蔵寺は中部圏最大の住宅団地であり、その構想は、先発の千里ニュータウン、あとにつづく原田丘陵、多摩丘陵等の住宅地開発が近隣住区単位の構成を基調としているのみに対して、このような何らかの単位は存在せず、都市的施設の集約を計った求心性の強い、ワンセンターシステムのユニークなパターンをした住宅都市である。ここに住む人々に単調な住宅地ではなくダイナミックな魅力をもつ生活環境を——都市環境の未来の水準を約束している。その構想の最大の焦点は住宅計画の課題であった「人と車の分離」という原則であり、この問題を立体的なベデストリアンデッキによって解決している。独創的な計画の提案であるということが出来る。欲をいえば事業の実施段階での研究、ニュータウンが周辺の地域へおよぼす影響、在来の居住者との間に起る格差・社会意識の違い、区画整理方式による新開発の欠陥などの問題点の指摘のみに止まらず、今後の事業の進捗にともなう調査研究を重ね、具体的な問題解決の手法の提案を望みたい。ともあれわが国においても、行政者でも研究者でもなく、また技術家でもない都市計画家という職業を確立するひとつのきっかけが作られることになったことは大きな収穫である。

* 正会員 工博 名古屋大学教授 工学部土木工学科